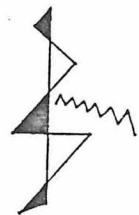


★特集 国家論——国境と想像力

政治的国家・論へ



橋爪 大三郎

政治的国家はなにゆえ存在するようになったのだろうか？そしてなにゆえ存在することをやめないのだろうか？

この二〇世紀後半、国家は地表を限なく分断しつくしている。いくらんだ国境が、人類を単一の共同社会に統合する途を阻んでいるとみえる。

こうした現状こそ、資本制と厳密に対応するものだという。たしかに資本制は、ひとつの歴史的段階である。事物と人間とが相互に交渉する領域（すなわち経済領域）に結ばれた、一特殊形態にちがいない。そしてそのメカニズムが順調に作動するためには、事物と人間の一切を包みこむ絶対的な法空間が必要であらう。この法空間を具体化するものこそ、政治的国家にはかならぬ。

それはそうかもしれない。が、それだけでは、政治的国家が分立し抗争しあう必然が見えてこない。あまねく展開しようとする資本制の理念からすれば、本来国境は不要であり、最終的には単一の法

空間が必要にして十分、ということではよいではないか。

政治的国家のいまある現状は、ほんの過渡的な一段階にすぎないのさ、と樂觀すること。これもひとつの理解ではあらう。しかし、この樂觀の範囲におさまりきらない事情もあるのではないか。いま試みにそれらを取りだしてみようと、本質的につきの三点であり、それに尽きるのではないかと思われる…

(1)資本制の正当化をめぐる分岐。一方の政治的国家が資本制を擁護すべきものとみなすのに対して、もう一方の政治的国家は廃棄すべきものとみなす。

(2)資本制を支えるはずの下部構造の落差。一方が資本制的な政治的国家そのものであるのに対して、もう一方はかろうじてその同時代を演じるだけの劇場国家にすぎない。

(3)資本制を支える地質学的堆積の差異。一方の資本制と政治的国家とが原型だとすると、もう一方は文化的な系統発生を異にす

るその機能的な同位体である。

図式的に、(2)は南北の対立軸。(3)は典型的に「日本」資本制の問題であると言つてよい。地表に分布する社会の実態にこのような不均質が刻印されている限り、それに対応する政治的国家が分岐するのもしやむをえないところだ。

言うまでもなく最大の焦点は(1)、すなわち東西の対立軸にある。現実の米ソの対立は、多分に(2)、(3)の要素にも根ざすにちがいないが、まずそれを(1)に純化して考えよう。

ソビエト国家の存在理由。それは、アメリカ（およびその他の資本制的な諸）国家に対抗し、（最終的には）世界革命を実現すること、これ以外にない。この使命がソビエト国家に例外的な正当性を与えるかどうかはひとえに、政治的国家が資本制に作用してそれを解除できる」という命題（マルクス・レーニン主義の基本テーゼ）の成否にかかっている。私の検討によると、この命題の成立はまことに疑わしい。社会主義圏の人びとも大多数が、同じように疑っているはずである。けれども問題は、そのことがかえってソビエト国家をかたくな自己肯定に追いやる構造になっていることだ。米ソ両国家の関係がかように不確定であることが、人類史の現段階を画している。

米ソ確執の行方を占うべく、米ソ両国家の構築そのものに濃厚な宗教的動機が付着しているさまを、みてとるのもよいだろう。

ピューリタンを父祖として建国されたアメリカが、改革派の倫理

規範を下地とするのは当然である。カルヴァンの『キリスト教綱要』などを参照すると、大統領職に対する帰依の心情の由来もよく理解できる。地上の政治権力者は神の召命によるのであり、彼は地上の支配のすべてを委ねられている。しかし同時に、王制あり共和制あり、地上の国家形態は多様であるのがよい。真実の教会がただ一つあり、われわれの目に視えるべくもないからこそかえって、地上の教会も、また彼らの政治的国家も、多様でなければならないのである。

かかる「アメリカの平和」の青写真に対する、最大の敵対物。それがはかならぬ、ニダヤ教的政治国家なのだ。ニダヤ主義はこととあらうにこの地上に、究極の社会秩序、究極の政治的国家の実現をめざす。霊的な神の王国を信ぜず、二重の王国論を否定するゆえに。だからまさしく、福音から見放された、恐るべき悪の結晶と映るしかない。アメリカにとって「唯物論」的マルクス主義こそ、この悪しきニダヤ主義の現代版である！

このように米ソ両国家（圏）の境界は、ただの国境ではない。両側からの熱い宗教的エネルギーに支えられている。とすると、それはいにしえの宗教地図の再現ともみられるわけだ。キリスト教vsニダヤ教。あるいは、西ローマvs東ローマ。資本制（＝地上のメカニズム）に対する、両様の宗教的態度の差異。それが今に尾をひいている。

ところで、政治的國家の宗教的様相について、わが国で特に興味ぶかい見解を示しているのは、吉本隆明である。

彼の「共同幻想論」が現れたのは、かれこれもう二十年も前のことになる。私(ら)には新鮮な刺激だった。この仕事は、硬化したマルクス主義の教条に抗し、マルクスの当初の構想を復元することを企図する。そう、宣言して始まったはずだ。ユダヤ人問題・ヘーゲル国法論批判を論ずる若きマルクスにはの見た、法・宗教・國家の展開を人間の幻想領域においてたどる理路。これを吉本は、わが列島にまでひきのぼす。

今日見返すなら、彼の仕事は独特の魅力とともに、固有の制約をも抱えていたと言わざるをえないだろう。そして吉本はいま、彼の必然に従い、『ハイ・イメージ論』にたどりついた『海燕』に連載中)。そこでは権力も、イメージとの関連から語られる。

先だって、吉本の講演を聴く機会があった(八六年一〇月一日・名古屋・菊屋まつり)。その折興味深かったのは、彼が権力を、ハイ・イメージ論という世界視線と結びつけて語ったことである。世界視線とは簡単にいうと、われわれを垂直に見下ろし客観として規定する、なかば架空の視線であるらしい。で、吉本の言によると、古代の王権は、小高い丘の上から「民の籠にぎわいにけり」と見下ろすような、せいぜい地上数十mの世界視線を手にしていたにすぎなかった。これに対して現在の米ソ世界権力のそれは、地上数十万mからの、人工衛星ランドサットの視界に象徴される。

別が意味を持たなくなってしまうはずだから、おそらくわれわれの知っている権力の基盤もすっかり掘り崩されるだろう。人間主義からの出口である。しかし、この段階に達するまで政治的國家は無化されませんというのでは、むしろ権力の永続を証明してしまったと同じではないか。

吉本は、何はどうあれ、政治的國家の存在をそもそも悪と考える姿勢を崩さない。それはおそらく無理からぬことで、理解できる。政治的國家は実際、あまりにもしばしば許しがたい害悪の源泉であった。けれども私はまだ、政治的國家が必然的に悪でなければならぬことの証明を見えないような気がする。

私の想定によると、まず、権力は悪でない。権力は(定義にもよるが)、社会のいたるところに遍在しているはずで、きれいに解除したり根絶したりするわけにはいかないものだ。つぎに政治的國家であるが、それはこの権力が、ある条件のもとで、明瞭な形態に編成されたものである。その条件とはつぎのようであろう。ある一群の人びとの行為の系列(生活形式)と別の人びとのそれとが、無関係ないし無矛盾である場合。そこに國家Ⅱ権力の出る幕はない。これに対して、異なる生活形式が関係しあい、かつ互いに矛盾する場合が問題である。その際、当の生活形式を保守しようとする強力な権力が双方の側に働こう。双方を調停する権力が現れるとしても、それが新たな生活形式を設定する結果、改めてより大きな矛盾が出

続けて吉本が言うのには、より高度な世界視線に対応する権力が成立すると、より低次の権力は無化され、のこらず解除されるはずだ。米ソ國家の抛ってたつ世界視線といえども、究極のものであるまい。いったん民衆が、無限遠点からする世界視線の位置をわがものとしさえすれば、政治権力は一切解消してしまうのだ、と。大衆の原像を繰込むという知の課題と、政治的國家の死滅を志向するモチーフとが、ここに再び結合を上げている。

なるほど、吉本の言うことは筋が通っているみたいだ。そこで私は想いめぐらしてみ、民衆が世界視線の無限遠点を占めるときとは、いったいどんな場合なのか? これがなかなか想像しにくい。やっとひとつ考えついた。それは、われわれがモーロクし、惚けきってしまったときではないか。究極の世界視線は、生物と無機物を区別せず、都市の人為と自然を区別しない。だから、石ころとパンの見境がつかず口に突っこんでしまったり、自分と他人も区別できず、手前の片腕をちょんぎって与えたり、ひとの尻肉に喰らいついたり。これならたしかに、「世界視線をわがものとしている」わけだ。そんなボケ極まった民衆(生きボケ達)の前では、どんな権力の形態も無化されてしまうだろう。だが、このヨイヨイ共同体は、果たしてわれわれの目指すべき理想世界なのだろうか?

もうひとつ思いついたのは、未来社会の極限(私のいう機械主義)のケースである。そこでは、人間が機械と接続し、ネットワークを組みあげる。そうすれば、そもそも生体/無機物・自己/他者の区

現してしまう。政治的國家はそうした微細な権力が順次に積み重なった、逃れがたい極相として訪れている。

政治的國家には解除できない根底があるだろうか? あるとすればそれは、われわれの生活形式(ないし文化、あるいは言語ゲーム)のまだら模様である。このまだら、われわれの過去一切を背負う前提であって、われわれの恣意には服さぬ事実性(factuality)なのだ。

フーコー以後、権力の微細な様相に目が向けられ、多彩な権力分析が試みられるようになったのは本當によいことだ。フーコー自身も晩年、性と権力が互いを織りこむ様を究めんとした。しかし反面この微細な権力と、伝統的な政治的國家とがどう関連するかは、このところ問題としてすっぱり抜け落ち、手がつけられていないようである。(言語ゲーム論を手がけていて、私はいっそうこの感を深くした。たとえば資本制の擁する市場は、他の領域とどのような身体上の連関を有するか? などなど、論すべき基礎的課題はあまりに多いのである。

* "Toward A Theory of Political State"

by Hasuzume Daisaburo 1987

(はしづめ・ださぶろう 社会学)